

ただいまご紹介いただきました、長和町の町長の羽田健一郎でございます。皆様方のお手元に、プロフィールということでお配りさせていただきました。

さて、今日は、この東信地域の市町村職員の皆さん、新しい職員の皆さんの研修ということで、1時間ほど話をせよと、このようなことでございます。私、和田の村長になったのが平成9年ですから、ちょうど20年になるのですけれども、確か十五、六年前、和田の村長のころ、1度、このような機会がありまして、お話をさせていただきました。それからもう15年たっておりますので、そのときに何を話したか忘れてしまいましたけれども、今日は思うがままにお話をさせていただきます。本来ですと、1時間のお話をすることは、1日や2日や3日ぐらいは準備に時間をかけて、しっかりと準備して皆さんにお話をしなければならないわけですが、なかなか時間が取れなくて、今申し上げた、思うがままにお話をさせていただきますけれども、お許しいただきたいと思います。

さて、私どもの町もそうですけれども、今、地方公務員になる、国家公務員もそうですけれども、非常に厳しいですね。1人募集すれば、10人以上の応募者があるという中で、今日お集まりの皆さんはその難関を突破してきた方でございますから、それぞれ大変優秀な皆さんだと思っております。また、難関を突破されて、公務員に合格されたことを心からお祝い申し上げる次第でございます。

私はいつも仲間の職員の皆さんにも言うのですけれども、私どもは選挙があるわけですね。市町村長は4年に1遍、選挙という関所があるのです。昨日、おとといですか、佐久の市長選挙、市議員選挙も行われましたけれども、その少し前には佐久穂町の町長選も行われました。大体、市町村長になる人はそれぞれ有権者の皆さんの前で訴えるわけですが、ある意味、耳ざわりのいいことを、やはり票が欲しいですから、耳ざわりのいいことを言うてしまうのです。平たく言えば、調子のいいことを言うてしまうのです。でも、公務員の皆さんは、まず一旦公務員になれば、よほど悪いことをしない限りは定年までずっと勤められるわけでございます。何を言いたいかという、40年ぐらいはずっと勤められるわけですね。従いまして、例えば、住民の皆さんに多少耳ざわりの悪いことも、将来の市町村のために「こういうことがいい」ということがあれば、そのようなことをしっかり学んでいただいて、住民の皆さんのために行政を進めていただくことができると思うのです。ですから、また市町村長と違った意味で皆さんは行政に対しての役割というものをしっかりと務めることができると思いますので、ひとつじっくりと、自分のある市町村をしっかりと把握しながら、そして他の市町村も勉強しながら、皆さんは住民のために、これからスタートをしていただきたいと思います。

さて、そのような中で今日は何をお話しさせていただこうかと考えてきたわけですが、先ほど私どもの町の町村合併のお話がありましたけれども、昭和の合併もありました。平成の合併もありました。このことを少しお話しさせていただきたいと思います。

市町村ですが、明治22年の、いわゆる自治法の制定された年ですね、市町村制の施行が行われた年。市町村は幾つあったかといいますと、まず長野県からお話しします。長野県

は、明治 22 年には市はゼロです。市は一つもなかったのです。長野市も松本市も上田市も佐久市も、市はなかったのです。近くで言えば、上田市は小県郡上田町。その後、いろいろところが合併して大上田市になりました。佐久市は、ご承知のとおり、北佐久郡と南佐久郡の町や村がありましたね。多分、小諸市は北佐久郡小諸町ではなかったかと思います。従いまして、長野県は市がゼロ、町が 16、村が 375 あったのです。合計で 391 の自治体が明治 22 年にはございました。全国を見ますと、それでも全国では市は 39 ありました。町村が 1 万 5,820 です。合計しますと、全国の市町村は 1 万 5,859。多かったですね。1 万 5,859 です。

昭和の大合併というものがございましたね。まだ皆さんが生まれる前です。昭和 30 年前後ですね。このころ、昭和の大合併がございました。昭和 28 年に町村合併促進法という法律ができて、それによって市町村合併が行われたわけですがけれども、このときに長野県は大分少なくなりました。明治 22 年よりは。でも、このときにはもう市ができて、昭和 28 年には 6 市ありました。町が 35、村が 337。ですから、このときは余りまだ減っていませんね。合計で 378 です。先ほど明治 22 年には 391 ありましたから、昭和 28 年には余り減っておらなかったわけですがけれども、昭和の大合併が終わった、昭和 36 年を見ますと、市が 17、町が 40、村が 82 で、140 に減ったのです。大分減りましたね。昭和 28 年には 378 あって、昭和 36 年には 140 です。では、全国を見てみますと、合計で昭和 28 年には 9,868 の市町村がありました。明治 22 年には 1 万 5,859 が、昭和 28 年には 9,868 に減りました。それで、昭和 35 年の昭和の合併が進んだときに、合計が 3,472 になりました。だから、約 3 分の 1 になったわけです。

さらに進みまして、平成の大合併です。平成の大合併は、市町村合併特例法の改正という法律がありまして、これによって市町村合併が行われたわけですがけれども、このときに長野県は、平成 18 年 3 月には市が 19、町が 25、村が 36 で、80 になりました。平成 18 年 3 月に 80 ですね。全国を見ますと、平成 16 年に 3,120 あったのが、1,821 に減りました。現在は、長野県は市が 19、町が 23、村が 35 で 77。最近はよく 77 市町村と言いますね。77 市町村に、平成の大合併が進んで、なったわけです。全国は 1,727 に減ったわけです。ですから、明治 22 年から見ますと、391 あったのが 77。全国が 1 万 5,859 あったのが 1,727 ですから、10 分の 1 ぐらいに減ったわけです。

これはなぜかという、国がそれぞれ財政的にだんだん厳しくなるわけですね。そうしますと、市町村合併を推進するわけです。ただ、長野県の平成の大合併は余り進まなかったのです。余りですよ。少しは進みましたがけれども。それはなぜかという、当時の知事、田中康夫さんを知っていますか、知事。やっていたことがあったのです。この田中康夫知事が余り合併の推進論者ではありませんでしたから、市町村に対して「合併をした方がいいよ」という県の指導が余りなかった。そのために、長野県は余り合併が進まなかったということだと思います。県知事が非常にこのことについて積極的な県は相当減っております。町村がたった四つしかないなど。例えば大分などは町村が四つしかないし、新潟も十

ぐらいしかありませんね。富山も少なくなりました。石川県も少なくなった。ですから、知事が合併を推進しようという県は相当少なくなりました。長野県は、今申し上げた田中康夫知事が余り合併に積極的ではありませんでした。

もう一つは、長野県の場合は、特に進まなかったのがご当地の南佐久です。南佐久と下伊那郡。下伊那郡はまだ町村が13あります。南佐久は六つですか。佐久穂町、小海町、南北相木、南牧、川上、そうですね。六つの町村が残っております。小県は、残念ながら、たった二つしかありません。青木村と私ども長和町。この近辺の平成の合併の状況を案内しますと、佐久地域の合併は、佐久市に臼田町と浅科村と望月町が合併して大佐久市になりました。それから、南佐久で佐久穂町、これが、八千穂村と佐久町が合併しまして佐久穂町になりました。上小の方は相当、合併が進みました。今申し上げましたように、小県は今、二つしかなくなってしまいました。昔は、先ほど申し上げた小県郡上田町がほとんど上田市になってしまった。従いまして、地域振興局も、上小地域振興局ではなくて上田地域振興局に名前が変わってしまいました。私は青木の村長さんと、去年はちょうど「真田丸」もやっておりましたから、そのような歴史的な名前はぜひ残してもらいたいと。上小、いわゆる上田・小県ですね。そのようなことをお話ししましたけれども、考えてみますと東御市は、上小といっても、そこに入らないのですね。東御市の町村はどちらかというと、「上小つつつても、うちは入らねえから、上田地域振興協でいいんじゃないか」と。上田市の市長さんももちろん「上田振興局でいいんじゃないか」と言いますと、人口的には、たった1万に行くか行かないかの、青木村の村長さんと長和町の町長がいくら声を大にしても、なかなか聞いてもらえなくて、上田地域振興局ということに今年からなったわけです。

上田・小県の合併には大分いろいろな動きがございました。まず動きがあったのは、当時、東部町ですね。東御市の場合は東部町。東部町が合併すると。「だけど、上田とは合併しないよ。上田に全部飲み込まれちゃうから、上田とは合併しないよ」と。東御市は郡を越えて、当時の北佐久郡の北御牧村と東御市。それから当時は、上田に合併してしまいました真田町も、東部町と真田町と北御牧が合併するのではないかというお話が出ました。でも、私はこのときに、真田町は東部町と山でつながっていますけれども、中に上田が入って、平らなところではつながっておりませんから、これは無理だろうと思っておりましたら、案の定、真田町が抜けまして、これは住民投票ではなくてアンケート調査によって真田町は上田と合併の選択をいたしまして、東部町と北御牧がまず先に合併して東御市という市に。当時、特例で3万人以上いると市になりましたので、その特例を使って東御市になったわけです。北御牧と東部町が合併して東御市に。これが確か16年でしたかね。一足先になりました。

その後、またいろいろな動きがありました。私ども、依田窪南部地域といいますけれども、今、上田と合併しました武石村と、長門町、和田村、この3カ町村で合併協議会ができました。それはなぜかといいますと、先ほど少し話に出ました依田窪病院、これは医療

ですね。これを3カ町村の組合立でやっていました。依田窪病院、組合立です。それから福祉面では、依田窪福祉会という福祉法人がございました。これは特養の「ともしび」を運営しておりましたけれども、この依田窪福祉会が長門・武石・和田の三つで運営しておりました。これが福祉ですね。それから、教育。依田窪南部中学、これは武石村と長門町が組合立でこの中学校を運営しておりました。今年から、和田の子供も南部中学に来るようになりました。一緒になりましたけれども。そのような、いわゆる医療・福祉・教育、このようなことを一緒にしているから合併しようではないかという任意協議会ができて、合併協議が始まりました。

そこへ今度は上田市から、大上田市を作りたいと。0268の会という会がありました、任意の団体が。0268の会とは、電話番号の0268ですね。これは上田地域です。坂城まで入っているでしょうか。上田地域が0268ということで0268の会という会ができて、実は私も、羽田事務所にいたころ、その事務局的なお手伝いをしていました。「やはり上田は20万都市を建設しよう」ということでお手伝いをしておりました。その、0268の会上田市が、いよいよ合併に動き出しました。それぞれの町村に「合併しようじゃないか」という声かけが始まりました。それは当時、東御はもうそのような形で、先ほど申し上げた東御市に入っていましたから、多分声がかからなかったと思いますけれども、真田町、丸子町、武石村、長門町、和田村と、五つの町村にそのような声がかかりました。ただ、私はそのときに、上田市の皆さんが来たときに、和田の村長をやっていましたから、「和田の村長は昔、0268の会の事務局をやっていたから、上田市合併賛成でしような」と、このように来ましたが、やはり当時の和田村の村民の皆さんは大きな合併は望んでいませんでした。従いまして、それに対して私は「やはり立場が違くと、そういうわけにいかん」ということで、お断りいたしました。長門町も断りました。今申し上げた丸子町、武石村、真田町は、上田市の声がかかって合併協議ができました。ですから、武石村はそれによって、3カ町村で協議していたのを離脱して上田市の方へ来ました。さあ、では、私どもはどうするかと。武石村がいなくなってしまうと、どうしようかと。「じゃあ、残った者同士で小さな合併を考えるか」ということで、長門町と和田村の合併協議会ができました。従いまして、上小の場合には、東御市は既に進んでおる。そして上田市、真田町、丸子町、武石村、これで一つの協議会ができた。長門町、和田村の協議会ができた。青木村は、合併するなら上田市としかないのですけれども、当時の村長さんは「青木村は自立でいくぞ」ということで、上田市の合併協議会には入らなくて、今でも自立の道を歩んでおるわけです。そのような形になりました。

そうしましたら、丸子の住民の皆さんから、丸子の上、いわゆる依田窪ですね。丸子・武石・長門・和田、ここで合併すべきだと。そうしますと、3万人以上いますから、市になったのですね。住民発議が出ました。それぞれの議会に、町村長の意見書を付して、かけました。そのときに、依田窪市に賛成は和田の村長・私だけで、あとは丸子も武石も長門も反対の意見書をつけて出しました。しかしながら、依田窪地域の合併協議会ができた

わけです。そうしますと、非常に変則的だったのですね。上田の合併協議会ができています。それから、依田窪の協議会ができた。長門・和田の協議会ができた。ですから、丸子と武石と長門と和田は二つも法定合併協議会に入って話をしてくれていたのです。ですから、非常に変則的な形で進んでおりましたが、最終的に丸子町が住民投票をいたしました。当時の堀内町長さん、住民投票で決めるということで、住民投票にしました。

ならば、上田と依田窪、この二つの選択で住民投票をすればよかったですけれども、そこに「自立」を入れたのです。それで、上田が一番多かったのです。それはなぜかというところ、堀内町長さんは最初から「丸子町の合併は上田とでいい。依田窪は向かないよ」という形の中で上田との合併を望んでおりましたから、「自立」を入れたわけです。それで比較イトウで上田市。武石も住民投票をやり、丸子と一緒に「上田がいい」ということで、そこでもうはっきり形が決まり、今の形の大上田市。丸子・真田・武石が入り、そして残った長門・和田で合併した。長門・和田の合併が平成 17 年 10 月。上田市の合併がそれから半年おくれて 18 年の 3 月だったと思いましたが、そのような形で、平成の合併の決着がついたわけです。そのような形の中で、先ほど申し上げた、国はともかく合併を推進して。それはなぜかというところ、地方交付税を少しでも減らしたいという国の考えがあったのです。正直申し上げまして、今日は軽井沢の職員の方もいますけれども、「軽井沢」は不交付団体ですから、国から地方交付税をいただけていませんけれども、他の市町村は、今の状況では国からの地方交付税頼りの財政運営をしておりますから、この地方交付税を国は少しでも減らしたいわけです。合併したところは特例を作っておりますけれども、それから 10 年、15 年たつと減る地方交付税ですから、国の考えとすれば、少しでも合併してもらって地方交付税を少なくしたいという考えがあるのです。

そこへもう一つあるのが、地方分権です。地方分権という言葉は聞いたことがありますね。言われて大分たちますね。もう、20 年くらいたつのではないのでしょうか。もっとたつかな。当時、国は地方分権をして、地域のことは地域でやるということを出しておったわけですが、この地方分権がなかなか進まないのです。

それと、道州制ですね。道州制もほとんど進んでいません。地方分権も進んでいません。要は、当時の考えでは基礎自治体が 30 万から 50 万。1 地方自治体が 30 万から 50 万にすると、300 で大体済むと。そうしますと、県が要らなくなってしまうのです。長野県の場合には、四つか五つの市になってしまうのです。そうすると、この地域は上田地域と佐久地域とに分かれていますけれども、多分これ全部一緒になって 50 万。50 万にはならないかな。

ですから、そうなりますと、本当に地方分権が進んで合併が進みますと、東信地区が一つ、北信地区が一つ、中信地区が一つ、それから、南信地区が二つになるか一つになるか。そのようなことで、今、200 万県民があるところが四つか五つになる。そうすると、県が要らなくなる。そのような中で地方分権が進んでくる。いろいろな財源も権限も地方に任せる。そのような中で県が要らなくなるから、そこに道州制が入ってくるということです。

けれども、道州制も全然話が進みませんし、地方分権も進みません。それはなぜか。これは私が思っていることですが、やはり国が、このようなことを言うてはいけないけれども、東大法学部、高級官僚、この皆さんが「財源も権限も、地方になんか譲るか。われわれがしっかりと握っていて、それでコントロールするよ。あんた方はわれわれの言うことを聞いてればいいんだ」と、このような考えがないとは言えないと思うのです。ですから、地方分権や道州制がなかなか進まないということではないかなと、このように思っております。

合併の話、地方分権、道州制の話はそのくらいにしまして、まだ30分ございます。次の話は、壁。いわゆる、人生においても壁というものがありますね。いろいろなところで一つの壁というものがあって、それを乗り越えていく。この話をさせていただきますけれども、実は私は、小さいころから足がとても速かったのです。陸上競技をしておりました。今の体形から見ると、思えないかもしれませんが、100メートルの選手でした。それで、記録をずっと見てみますと、私は中学1年のときに14秒0。100メートル、14秒0。余り速くないですね。でも、中学1年ですから。中学2年のときには12秒6でした。大分縮まったのです。それから、中学3年のときには12秒0でした。大分縮まりました。当時、上小地域の中学生が上田陸上競技場に全員が集まって、上小大会で100メートル、小さな和田中学校ですけれども、優勝いたしました。

それから、今度は高校に行きまして、実は私は上田高校へ行ったのですけれども、本当は野球をやりたいかったのですが、野球部が全然勧誘に来なくて、陸上部が勧誘に来ました。「応援団の練習も嫌だから、じゃあ、運動部に入るか」ということで陸上部に入りました。やはり100メートル専門にやっておったのですけれども、高校1年のときに11秒5でした。高校1年の秋の大会から、大体、東信地区では敵がいなかったのですけれども、11秒5。だから、中学3年の12秒0から11秒5ですから、0.5秒。0.5というのは、100メートルでは大したものですよ。これが縮まったのです。ところが、高校2年のときに11秒4。だから、0.1秒縮まったのです、11秒5から。この記録が全く伸びないのです。何回走っても、11秒4を超えることができなかったのです。先ほど言った壁は、私の壁はこの11秒4にあったのです。何回、いろいろな大会に出ても、11秒4は出るのです、何回か。けれども、11秒4が切れないのです。それで、もうやめようかな、限界かなと思っておったのですが、友達や先生に「ここまで来れば、卒業するまでやれや」ということで、3年生になって春の大会で、先ほど申し上げた11秒3が出たのです。11秒4の壁が0.1秒縮まったのです。そうしたら、驚いたことに、11秒3が出たら11秒1が出て、11秒0が出て、さらには10秒9が出て、10秒8が出たのです。当時、昭和39年東京オリンピックのときが高校3年生でしたから、ちょうど東京オリンピックの年ですけれども、そのときに長野県で初めて10秒台を出したのです。それまで長野県の記録は11秒0でしたから、10秒8は長野県記録で、全国で、当時は、出したときは1番だったのです。その後、10秒7を出した人が2人出まして、10秒8はランキング3位だったのですけれども。

ですから、要は先ほどの壁の話ですけれども、11秒4が1年間切れなかった。ここで諦めたらそれで終わったのですけれども、「何とか」ということでみんなにも励まされて、努力して、その壁が破れたときに、どんどん、どんどんいい記録が出た。従いまして、皆さんも、仕事をやっていく上において一つの壁というものに必ずぶち当たると思います。その壁を乗り越えたときに皆さんの明るい未来があると思いますので、ひとつ、そこで諦めないで努力をしていただいて、その壁を打ち破って明るい未来を作っていただきたいと思うところです。これが一つ。

それから、もう一つお話をさせていただきます。もう一つは、お手元のプロフィールにも書かせていただきましたけれども、私は大学を卒業して1年間、東京で民間企業に勤めた後、長男坊でしたし、「いずれ和田へ帰らなきゃいかんわな」ということがありました。実は、羽田孜代議士が昭和44年の12月に初当選をして、国会議員でありましたので、少し関係もございましたので、相談に行きました。「何か田舎にいい仕事ありませんか」ということで相談に行きましたら、「ちょうど上田の秘書が今、辞めて、いないから、そこへ行ってろ」ということで、昭和45年5月から上田の事務所に勤めまして、羽田孜代議士の秘書をやりました。羽田孜代議士を知っていますか。知らないかな。2カ月だけ総理大臣をやったのです。長野県で初めて。知らない？ 知っている人、手を挙げて。知らない人もいるね。そうだね。

羽田孜さんの少し話を、ひっかけてさせていただきますけれども、羽田孜代議士はとてもまじめな方だったのですが、成城大学を出て小田急バスに勤務して、父親の羽田武嗣郎が引退して、その2世ですね、それで国会議員に出てきた。言ってみれば、このようなことを言うと代議士に怒られますけれども、超優秀な大学を出て、超一流企業にいて代議士になったのではなくて、これも失礼な話だね。小田急バスは小田急電鉄の子会社ですからね。それで代議士になりました。私はずっと26年間、一緒に政治活動をしておったのですけれども、一番感心したことは、与えられた仕事を本当に一生懸命やる、その積み重ね。与えられた仕事を、不満・不平を言わないで一生懸命やる。この積み重ね。農林水産大臣を2回やり、大蔵大臣をやり、外務大臣をやり、そして内閣総理大臣、先ほど申し上げた、たった2カ月ですけれども、でも、長野県で初めて総理大臣になった政治家です。そのことは、とても大切なことだと思います。

皆さんも、専門職は別にして、いろいろな部署に配置されると思います。公務員の場合ですから、2年か3年、長い人で5年でしょうか。余り5年はないかな。当然かわるわけですね。かわったときに、「俺はこんな部署冗談じゃねえ。俺はもっと優秀だわ。こんな部署に回されるなんて、とんでもねえわ」というようなことを言っては絶対にだめです。公務員の皆さんに与えられる仕事はみんな、大切な仕事です。住民の皆さんに直接接する部署もありますし、考えなければいけない部署もありますし、体を動かして、住民の皆さんの中に飛び込んでいかなければならない部署もあります。特に小さな町村は、大きな市などと違って、何でもこなしていかなければいけない。そのようなときに、先ほど申し上

げた専門職的な皆さんはその専門をずっとやっていけばいいですけども、そうもいきませんから、与えられた仕事を本当に一生懸命やる。その積み重ね。それがその人を大きく成長させる、伸ばしていく、このように思いますので、ひとつ皆さんも、これからいろいろな仕事を与えられると思います。それを一生懸命こなして、不平・不満を言わないで一生懸命やる。このことが、地域の住民の皆さんのためにもなり、そして皆様自身のためにもなると思いますので、ひとつ頑張ってくださいたいと、このように思う次第です。

まだ15分あるけれども、こんなところで。少し早過ぎますか。何か質問はあるかな。ないな。大体いいかな。あとは休んで。いいですか。ご清聴ありがとうございました。皆さんがこれから地域の皆さんのために、地域の市町村のために頑張ってくださいように、心からご祈念申し上げまして、少し早いですけれども、終わりにさせていただきます。大変ご苦労さまでした。